

恩地孝四郎《キリストとマリア》に関する一考察
—キリスト教モチーフの使用と表現をめぐって—

岩間 美佳（神戸大学）

《キリストとマリア》（1914）は、日本における抽象版画のパイオニアとして知られる恩地孝四郎（1891-1955）による最初期の作品である。画学生であった恩地は志を同じくする田中恭吉・藤森静雄と共に版画と詩歌のための同人誌『月映』を創刊している。本作品は1914年5月にまとめられた『月映』の私家版に発表された木版画のひとつである。

1910年代前半には、萬鉄五郎や岸田劉生らが、磔刑図や創世記の物語に取材した作品を制作している。ただし恩地が描く《キリストとマリア》は、西洋美術の伝統的なキリスト教モチーフの描き方から大きく逸脱している。この作品におけるキリストは、腰布を纏わず、皮を剥がれたような異様な身体として表現される。十字架に縋りつくマグダラのマリアは全裸であるうえに性毛が描き込まれ、頭部と局部からは黒い線の束を放出する。輪郭線のみで描かれたキリストの透明な身体と、肌色の色面で構成されるマリアの身体の間には、天に昇りつつある死者と地に伏し嘆く生者の間の対照性が示されているが、キリストとマリアの身体における性的な肉体表現は、信仰を逸脱した意味が作品に込められていることを示唆している。十字架からそのまま昇天するキリストのイメージもまた、聖書の記述と矛盾している。

桑原規子は本作品に関して、キリストの身体に施されたデフォルメが『月映』初期の恩地の作風に一致し、その死を嘆く現実の女としてマリアが描かれたことを示唆している。本発表ではこうした見解を踏まえつつ、恩地が描いた複数のキリスト教モチーフの存在も視野に入れながら、宗教的モチーフの借用とそこから逸脱という観点から《キリストとマリア》を解釈する。

とりわけ本発表では、この作品を当時の文学的潮流との関係の中に位置づける。明治末から大正初めの文学・思想では、キリスト教モチーフを西洋の伝統に限定されない方法で解釈する傾向があった。『月映』同人が支持した北原白秋の南蛮詩では、殉教や異端のイメージと結びつく「切支丹」が官能とエキゾチズムの象徴として描かれた。同様に恩地が愛読した『白樺』では武者小路実篤がイエスや釈迦を個人として捉え、その生き方を独自の人格主義に引きつけて解釈している。

本発表では、恩地の同時期の作品との比較と『月映』で共有されたテーマとの関連から、本作品中のキリストに病を患う親友の田中恭吉の姿が、マリアにはファム・ファタルのイメージが重ねられたことを指摘する。キリストに特定の個人を投影して描く点には武者小路の、マリアにデカダンな女性像を投影して描く点には、世紀末美術への参照と白秋からの影響が見て取れる。恩地によるキリスト教イメージの形成と表現上の逸脱は、1910年前後の日本における西洋美術の受容のあり方と文学的潮流に根ざしたものであったのだ。